

幼小連携につながる保育実践プログラムの開発 —絵本から「遊び」に発展させる事例を通して—

Development of childcare practice program leading from kindergarten to elementary school : Through a case of developing from a picture book to play

徳永加代*・岡澤哲子**

Kayo Tokunaga Tetsuko Okazawa

本研究では、平成29年に改訂された幼稚園教育要領が求める幼小連携につながる「幼児教育において育みたい資質・能力」について焦点をあてる。絵本から「遊び」に発展させた保育プログラムを試行し、子どもの姿からその有効性について考察した。その結果、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」が生まれ、言葉の広がりがかがえる事例が観察され、絵本から「遊び」に発展させるプログラムの有効性が認められた。

1. 幼児教育の共通性と小学校教育との接続

平成29年に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園・保育要領」(以下、「幼稚園教育要領等」)が改訂され、平成30年4月から施行された。今回の改訂では、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園は幼児教育施設として位置付けられ、「幼児教育において育みたい資質・能力」が定義づけられた。幼児教育施設に共通する「幼児教育のあり方」として、「環境を通じた教育」「乳児期からの発達と学びの連続性」「小学校教育との接続のあり方」が明示されている。¹⁾

また、幼稚園教育要領等においては、健康、人間関係、環境、言葉、表現の5領域のねらいおよび内容に基づいた具体的な姿である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(①健康な心と体②自立心③協同性④道徳性・規範意識の芽生え⑤社会生活との関わり⑥思考力の芽生え⑦自然との関わり・生命尊重⑧数量・図形、文字等への関心・感覚⑨言葉による伝え合い⑩豊かな感性と表現)」の10項目が示された。

さらに、小学校学習指導要領においては、幼児教育の学びの成果が小学校と共有されるよう工夫・改善を行うことを通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿をふまえた指導を工夫すること」が求められている。つまり、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を行うことにより、3つの「資質・能力」を確かに育むことが求められているといえよう。

2. 幼児教育において育みたい資質・能力の3つの柱

上に述べたように、小学校教育につながる幼児教育には、乳児からの発達の連続性や小学校以上の学校教育において共通する「資質・能力」の育成が求められている。「幼稚

* こども学科 准教授

** こども学科 教授

園教育において育みたい資質・能力」について、「幼稚園教育要領」には、次のように示されている。¹⁾

- (1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かったり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力、判断力、表現力等の基礎」
- (3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力、人間性等」

ここでいう「知識・技能」は、周りにあるものやことなどの個別の特徴に気づき、それぞれにふさわしい関わり方ができるようになること、「思考力・判断力・表現力等」は幼児が工夫や何かを試すところに現れる。「学びに向かう力・人間性等」は、興味を持って粘り強く、難しいことに挑戦し、意欲的に取り組む姿といえる。

小学校以上の「学習指導要領」では、育成すべき「資質・能力」の3つの柱は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」となり、高等学校まで一貫して育まれるものとなる。

「知識・技能」では、何を理解しているか・何ができるか、社会の様々な場面で活用できる知識・技能として体系化しながら身に付けていくことが必要である。「思考力、判断力、表現力等」では、理解していること・できることをどう使うか、さらにプロセスを振り返って次の問題発見・解決につなげていく力が求められる。「学びに向かう力、人間性等」では、どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか、互いのよさを生かして協働する力も重要である。

幼稚園教育においては、それらの基礎を培う。心が動かされる豊かな体験をすることにより、おもしろい、不思議、きれいだな、何だろうといった思いが意欲を生み、好奇心が働いて実現してみようと思う動機や態度につながるだろう。幼児は、身近な環境に主体的に関わり、環境との関わりや意味に気づき、これらを取り入れようとして試行錯誤するという過程を通して、3つの「資質・能力」を身につけるといえよう。

3. 幼稚園教育要領における領域「言葉」

角田ら(2018)は、小学校教育とつながる幼稚園教育における「言葉」について、次のように述べている。(引用中の下線は論者が添えた。以下同様)²⁾

「言葉」は現実的な実際の場面の中で学ばれ、育まれるようになっている。言葉の発達が著しいこの幼児期に、安心して過ごせる環境、共感し合える人間関係のもと、多様な経験をし、感性を育てておくとともに、相手の話を聞いたり自分の思ったことを伝えようとしたりする姿勢を育てておくことは、小学校以上の学習全般の基盤となるものと考えている。

小学校では、どの学習においても、言葉をよく聞いて考え言葉を使って表現し、対話しながら考えを広げ深めていく。「相手の話を聞いたり自分の思ったことを伝えようとし

たりする姿勢を育てておくことは、小学校以上の学習全般の基盤となるもの」とあるように、言葉による伝え合いの力を育てておくことは、互いの思いや考えを伝え合い、受け止めて認め合いながら、共に活動するために不可欠である。つまり、幼児期の言葉の育ちは、小学校以上における全ての学習活動の基盤として重要なものであるといえよう。

「言葉」の領域における「ねらい」について、「幼稚園教育要領」では、次のように示されている。¹⁾

言葉

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

1 ねらい

- (1) 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- (2) 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- (3) 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語に親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

「ねらい」は、幼稚園において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものである。今回の改訂では、ねらいの(3)に「言葉に対する感覚を豊かにし」という文言が加えられた。またこれに連動して、内容の取扱いにおいては「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」が新設された。

今までの言葉の理解とそれを育てる絵本や物語に接すること、先生や友達と言葉により心を通わせることだけでなく、「言葉の感覚を豊かにする」ことが入っている。言葉の感覚とは、言葉の響きやリズムに敏感になることである。そのためには、言葉そのものへの関心を促し、言葉の楽しさや面白さや微妙なニュアンスや音の響きに気付くようにしていかなければならない。そのための絵本や物語や言葉遊びなど、どのような児童文化財を選択するかが重要になってくる。

森川(2018)は、幼保小接続をより効果的なものとするために「幼稚園・保育園・こども園では、①遊び・生活のなかで、言葉を豊かにし、その言葉を積極的に使う機会をつくること②子どもの描写などの遊びに、保育者が働きかけ、子どもの言葉を引き出すことを、これまで以上に意識的に取り組むことが重要である」と述べている。³⁾

子どもは、遊びや生活において経験したことについて自分の思いを表現しながら言葉を獲得し、感じたことや気づいたことを言葉として伝え合うことを学んでいく。子どもにとって心を動かされるような体験や喜びが、言葉の発達の基盤にあることを保育者は改めて確認することが必要である。

4. 豊かな言葉を習得する児童文化財としての絵本

幼児教育においては、環境にあるもの全てが教材である。その中でも、心地よい言葉のリズムの繰り返しと鮮やかで大胆な絵と色を楽しむ絵本は、言葉に関する感覚を豊か

にするうえで、大きな役割を果たしている。幼児期における絵本は、それを与える大人の願い（子どもの情操を養う、科学的な知識を養うなど）が詰まった児童文化財であり、言葉の面白さや美しい日本語を伝え、子どもの言葉と心を育むために欠かせないものである。

絵本の読み聞かせは、聞く力やイメージする力の促進をはじめとして様々な言葉の発達を促す。幼児期における絵本との出会いは、絵本と関わってくれた大人との心のふれ合いを通して言葉の世界を楽しみ創造力を膨らませ、子どもの情操、探究心、考える力、生きる力を育てていく。

近藤(2018)は、絵本の読み聞かせについて、次のように述べている。⁴⁾

幼稚園や保育所などの幼児教育における集団での読み聞かせは、絵本の楽しさを友達と一緒に味わい、友達が感じたことを刺激として受けて楽しむ。いろいろな感じ方を知り、友達と共感し、共通のイメージをもたせ、次の遊びや生活を豊かなものとしていく。

子どもにとって遊びや体験から生まれるイメージを表現する手段が言葉であり、イメージの豊かさが言葉の発達を生み出す。「次の遊びや生活を豊かなものとしていく」とあるように、絵本からイメージを膨らませて構成する物語作りや劇ごっこなども、言葉の発達に大きな影響を与える。言葉を使って想像の世界を広げていく活動は、小学校における言葉の学びへとつながるだろう。様々な児童文化財との出会いや心弾む体験を保育者は用意しなければならない。

5. 絵本から「遊び」に発展させる保育実践「まほうのでんしレンジ あそび」の考察

以下、論者が、明日香村立明日香幼稚園において学生6名と行った、幼稚園と大学等の連携による「3じからのわくわくあそび」という預かり保育時間内での絵本『まほうのでんしレンジ』から遊びに発展させる保育実践について、考察を行っていく。

5.1 保育実践「まほうのでんしレンジ あそび」の概要

〔対象〕明日香村立明日香幼稚園 4歳児12名 5歳児13名

〔日時〕平成28年6月11日 15時～16時

〔場所〕明日香村立明日香幼稚園 体育室

〔ねらい〕好きな食べ物を作り発表することを楽しむ。

言葉の響きやリズムを楽しむ。

〔内容〕意見を出し合い協力しながら好きな食べ物を作り発表する。

〔記録〕ビデオカメラによる記録・事後の振り返りシートによる記録

5.2 絵本『まほうのでんしレンジ』（原案：たかおかまりこ 絵・作：さいとうしのぶ 出版社：ひかりのくに 出版年：2013年）の「遊び」につながる特徴

子どもたちの好きな食べたことのある食べ物が登場するので親しみやすく、自分たちも作ってみたいという気持ちを誘い出す。食べ物は本物に近い大きさであり、電子レンジのように下に向けてページを開くことにより、子どもたちの想像力を刺激する。空の

お皿を入れて食べたいものをおまじないのように歌うと料理ができあがる。繰り返しのリズムが楽しい。子どもたちもすぐに覚えて口ずさむことができる。

5.3 「まほうのでんしレンジ あそび」の実際

表1は、「まほうのでんしレンジ あそび」における子どもの活動、子どもの姿(動き、表情、つぶやき)、保育者(学生・大学教員)の援助、考察を示したものである。

子どもは人に話したくなるような経験をして、自分なりの言葉によって表現し、相手にうなずいてもらったり言葉で応答してもらったりすることにより言葉で表現しようという意欲が高まっていく。とはいえ、自分の感じたことや見たことすべてを言葉にして表現できるわけではない。たとえ言葉を使って表現できなくても、具体的なイメージとして心の中に蓄積していくことは、言葉の感覚を豊かにするためには重要なことである。

本実践では『まほうのでんしレンジ』の読み聞かせを楽しんだ後、「自分たちの食べたいものを作り、作った食べ物のイメージを共有できるようにみんなに発表する」場面を設定した。読み手が、コックコートを着て登場したり、「チーン」という効果音を鳴らしたりすることにより、イメージが広がるようにした。共通の課題をもって活動することのおもしろさや充実感を味わわせるために、グループで一つの料理を考えさせた。

5.4 「まほうのでんしレンジ あそび」についての考察

(1) 言葉の広がりについて

絵本『まほうのでんしレンジ』は、昨年度も読み聞かせを行っているため、知っている子どももいたが、興味をもって集中していた。絵本の読み聞かせにおいては、何回も出てくる「はらぺこりんりん はらぺこりんりん ○○がたべたいな」の部分でみんなが歌い、言葉のリズムを楽しんだ。特に、「チーン」という電子レンジの出来上がりの効果音の部分で気に入って歌っていた。

次に、自分たちが作った食べ物を発表する場面においては、「はらぺこりんりん はらぺこりんりん なあにかな たべたいな」と替え歌にして歌った。ピアノ伴奏の効果もあって、子どもたちはすぐに覚えて大きな声で歌うことができた。言葉の響きがよく、なじみやすい「はらぺこりんりん」は、食べ物を作るときにも口ずさんでいる子どももいた。

絵本は親しみやすい絵と言葉によってイメージをふくらませ、想像の世界を豊かにする。例えば、絵本の中のケチャップがかかっているオムライスをおっきい。ケチャップがお布団みたい」と例えたり、金魚鉢をみて「次は大きいパフェやで」と予想を言ったりしながら、想像を広げていることがわかる。何を作るかを考えたとき「宇宙まで届く大きなケーキを作りたい」と大きさを例えている。絵本の中で金魚鉢の中に巨大パフェが出てくるところがあり、それが印象的であったのだろう。

そして、他のグループが作ったケーキにのっているクリームを表現した綿をみて「ふわふわしている」と擬態語を使って表現するなど、自分なりの言葉の表現を楽しんでいることがうかがえる。

(2) 「幼稚園教育において育みたい資質・能力」について

①知識・技能の基礎

子どもたちは、具体的な色や形を思い浮かべながら、画用紙・毛糸・ストロー・綿な

表1 「まほうの電子レンジ あそび」の実際

子どもの活動	子どもの姿 (動き、表情、つぶやき)	保育者(学生・大学教員)の援助	考察
あいさつ	・学生のところに集まってくる。	・リズム室のの中心に立って集まるように声掛けをする。	・期待感をもちながら集まってくる。楽しみにしている様子が見える。
	・大きな声で「こんにちは」	・「みなさん こんにちは」	・日常生活の言葉である「あいさつの言葉」が身につけている。
	・質問に答えようと考えている。 ・大きな声で「たまねぎ」という。 ・「カレーカレー」といながら跳び跳ねる。 ・「ケーキ」	・「昨日夜何食べたか、覚えてる」 ・「夜ご飯」 ・「たまねぎ？」 ・「カレー」「ケーキ」とうなずきながら、確認する	・料理の名前を聞かれていることに気づき「カレー」を強調している。材料と料理名の区別ができてきているようである。
	・「コックさん？」	・「今日はみんなに美味しいものを作ってくれるコックさんをよんでいます。」 ・出てきてもらいましょう」	・「コックさん」という言葉に反応し想像している。
	・興味津々で待ち構える。 ・少し驚いた様子を見せ、喜んだ。大きな声で「こんにちは」	・コックコートを着た保育者が登場する。「こんにちは」	・保育者のあいさつに大きな声で答えている。
	・答えるように大きな声で「よろしくお願いします。」	・「おいしいものを作りにきました。加代ちゃんです。よろしくお願いします。」	・自然にあいさつができる。コミュニケーションの基礎が身につけている。
絵本の読み聞かせを聞く	・「見たことある」「知ってる」と言いながら前の方に寄っていく。 ・「一緒に…」の言葉に反応し、楽しそうにうなずきながら絵本を見つめる。	・絵本『まほうの電子レンジ』の表紙を見せる。 ・「知ってる人は一緒に歌ったりしてくださいね。」 ・絵本を読み始める	・読み聞かせを通してすでに知っている子どももいたが、楽しみにしていることが伝わってくる。
	・一緒に歌いだす。 「はらぺこりんりん はらぺこりんりん」 「オムライスがたべたいな ちーん」	・途中「はらぺこりんりん はらぺこりんりん」「オムライスがたべたいな ちーん」の箇所を読む。 ・ピアノ伴奏、「ちーん」はベルの音を鳴らす。	・興味をもって集中している。 ・言葉の響きやリズムの楽しさに気づいている。 ・繰り返しの言葉のおもしろさを感じている。
	・何ができたかを真剣に見つめる。 ・繰り返して読み手と一緒に歌い楽しむ。 ・オムライスの絵を見て「おっけい！ケチャップがお布団みたい」と言って嬉しそうに話す。		・特に「チーン」という電子レンジの出来上がりの音の部分を気に入って歌っているようであった。
	・「つぎ大きいパフェやで」と学生に教える。		・ケチャップがかかっている絵をみて、「お布団」に例えて表現している。
	「おめでとう」	最後のページを見せて「みんなでおめでとうを言ってあげましょう」	・以前、読んだことがあったのか、次にでてくる食べ物をつぶやく。 ・この場面における「おめでとう」の意味がきちんと理解できているかは疑問である。
	「まほうの電子レンジあそび」の遊びを理解する	・大きな「電子レンジ」が出てきたことに喜ぶ。 ・「熱いからやけどするからな」	・「まほうの電子レンジ遊び」の見本を見せるねと伝える。 ・「まほうの電子レンジをもってきたのでみせましょう」 ・「まほうの電子レンジ」を子どもの前に運ぶ。「触らない」 ・「みんなにもお料理をつくってもらいますよ」 ・「お姉さんに見本をつくってもらいましょう。」 ・お皿を裏返しにした2人が電子レンジの中に入る。
・より一層大きな声で歌う。		・「みんなで歌いましょう」	・言葉の響きやリズムの楽しさに気づいている。
・「はらぺこりんりん はらぺこりんりんなあにかな」「たべたいな チーン」			・何ができるのか期待しながら待っている。
・「カレーライス」		・「あんなお姉さんのは何ですか」	
・「にんじん」「ごはん」「じゃがいも」「トマト」「つけもの」「ふくじんづけ」「カレールー」「お肉」と次々に答えた。		「(作ったカレーをみせながら) カレーライスの中に何が入っていますか」	・カレーライスの材料の名前を理解している。
・「ケーキ」 ・「ケーキ大好き！」と言ってケーキがでてきたときとても喜んだ。		・「あみお姉さんのは何ですか」	・できたことに対する喜び・達成感を表現している。
・「いちご」「クリーム」「ブルーベリーののってるときもある」		・「そうですね。ケーキです。ケーキには何がのっていますか」 ・「そうそう。今日はいちごだけど、ブルーベリーがのっていることもあるね。」	・ケーキののっている果物やクリームも理解している。 ・ブルーベリーと答えた子どもは自分の答えに満足している。

自分たちの食べたい物を作る	・「つくりたい」何をつくるかと考えてわくわくしている。口ぐちに食べ物をつぶやく。	・「今からみんなに好きな食べたいものを作ってもらいます。」 「食べ物何を作りたい？」	・わくわくした様子で好きな食べ物を思い出しながら発表している。
	・「パフェ」「ケーキ」「パンケーキ」「ラーメン」「ドーナツ」「誕生日ケーキ」「アイスが食べたい」「宇宙まで届く大きなケーキを作りたい」という。		・「パフェ」という言葉が多く出た。絵本の中で金魚鉢の中に巨大パフェが出てくるところがあり、それが印象的だったと思われる。ケーキの大きさを自分なりの言葉で表現している。
	・画用紙や毛糸などの材料を使って、自分たちの好きな食べ物を作る。	・3つのグループに分かれて、食べたいものをみんなで作る。	・作りたいものが2つになったところもある。
		・各グループ、学生2人がサポートする。	・どんどんアイデアがわいてきて、次第に材料をとりいき、食べ物づくりに没頭していた。
	・ラーメンの具材を作っていた際「緑のストローは？これ切つてネギにする！」	・子どもたちの発想を生かし、協力するように促す。	・ねぎを緑のストローを輪切りしてつくるなど、より正確に思い出して再現しようとしている。
	・「豚！！」と答え、スポンジに茶色のペンで塗っていた。「ゆで卵ものせよう」「海苔ものせたい」	・材料を聞くことにより、何を作っているのかを意識させる。	・自分の作っているものを意識しながら具材を考え、様々な素材を活用して、食べ物を作っている。
	・「だんだんさくらんぼに見えてきた～！」と言いながらさくらんぼを作っていた。		・「こうしたらおいしそうになる」など、伝え合いながら色や形を思い浮かべ、食べ物を作っている。
	・材料のストローをみて「ろうそくたてようよ」 ・大きな土台とは別にオリジナルのケーキを作り、大きなケーキの隣につける。 ・「色塗ったら母に見えるね。」と言って見せる。 「チョコレート！」と自慢げに答える。	・茶色の毛糸をもっている子どもに「パフェやったら茶色ってなんやろう」と聞く。 ・子どもたちの言葉を受け止め共有する。「いいね」「上手やね」	・イメージを膨らませながら食べ物を作っている。 ・アイデアを出し合いながら作っている。
	・「見て 見て」と出来上がったものを自慢する。		・作ったものを確認している。 ・しっかりイメージをしなが作っている。
			・出来上がった満足感を「見て 見て」という言葉で伝えている。
作った食べ物を発表する	・すみれ1の子どもたちが、作った食べ物を電子レンジの裏に隠してグループみんなで電子レンジの中に入る。 ・みんなが歌う。 「はらぺこりんりん はらぺこりんりん なあにかな」「たべたいな チーン」 ・電子レンジから出てきて作ったものを見せる。一人一人に見せる。 すみれ1の子どもたちが答える。 ・「ケーキ」	・「作ったものをみんなに見せるよ。すみれ1さんお願いします。」 ・「みんなが歌うよ」	・うれしそうに電子レンジの中に作ったものをもってみんなで作る。 ・言葉の響きやリズムを楽しんでいる。 ・電子レンジから勢いよく出てきてみんなに自信たっぷりに見せる。
	・「誕生日ケーキ」「ろうそく」「ブルーベリー」「イチゴ」 ・作った料理のそばに多くの子どもが興味をもって寄っていき、後ろの子どもが「見えないう」という。 ・「ふわふわしてる」	・「ケーキには何がのっているのかな」 ・「ろうそくのせた」「ブルーベリーのせた」「いちごのせたの」	・「誕生日ケーキ」と言い直している。 ・デコレーションケーキをイメージして作ったことがわかる。 ・「〇〇のせた」のように「のせた」を補うことにより、自分の言葉をしっかり受け止められたことを感じるができる。 ・ケーキにのっている綿を見て「ふわふわ」と表現している。
	・みんなが大きな拍手をする。	「おいしそうだと思う人は拍手をしましょう」	・よさを認め合い、みんなで作った満足感を共有している。
	・すみれ2の子どもたちが、作った食べ物を電子レンジの裏に隠してグループみんなで電子レンジの中に入る。 ・みんなが歌う。 「はらぺこりんりん はらぺこりんりん なあにかな」「たべたいな チーン」 ・すみれ2の子どもたちが答える。・「ラーメンとパフェ」 ・「肉」[チャーシュー]「ねぎ」	・「すみれ2さんお願いします。」 ・「みんなが歌うよ」 ・「何ができたかな」 ・「ラーメンには何がのっているのかな」	・うれしそうに電子レンジの中に作ったものをもってみんなで作る。 ・言葉の響きやリズムを楽しんでいる。 ・自分たちの作ったものをはっきり答えることができる。 ・「何がのっているか」という質問に答えることができている。
	・「リンゴとバナナとさくらんぼとアイス」「イチゴ」「青りんご」と自分たちの作ったものを指さしながら話す。 ・みんなが大きな拍手をする。	・「パフェには何がのっているのかな」 「おいしそうだと思う人は拍手をしましょう」	・自信をもって作ったものを指さしながら答えている。材料をはっきり意識して作ったことが分かる。 ・よさを認め合い、みんなで作った満足感を共有している。
	・チュウリップの子どもたちが、作った食べ物を電子レンジの裏に隠してグループみんなで電子レンジの中に入る。 ・みんなが歌う。 「はらぺこりんりん はらぺこりんりん なあにかな」「たべたいな チーン」 ・チュウリップの子どもたちが答える。 ・「パフェ」「イチゴ」 ・できたものをみようとして前に集まってくる。	・チュウリップさんお願いします ・「なにができたかな」	・うれしそうに電子レンジの中に作ったものをもってみんなで作る。 ・言葉の響きやリズムを楽しんでいる。
	・「りんご」「ブドウ」 ・作ったものをみつけるのが何がのっているのかは答えられない。 ・みんなが大きな拍手をする。	・「何がのっているかな」 「おいしそうだと思う人は拍手をしましょう」	・自信なさそうに答える。 ・5歳児の子どもたちは、何ができたのか興味津々で見にくる。 ・何がのっているのか、何となく作ったものはわかっているようであるが、はっきり答えられない。 ・よさを認め合い、みんなで作った満足感を共有している。

ど、様々なものを用いて、「食べ物づくり」を行った。日常生活において、料理作りの工程やその目的を理解しているのも、教えられなくても、自ら「食べ物づくり」を楽しむことができる。子どもたちが、料理作りを理解できるのは、食事が最も関心のあることの一つであり、興味を引くものであるからであろう。

このように、生活に直接かかわること、興味を引き付けることについては、子どもたちは自然に知識として身につけていくことができる。つまり、「食べ物作り」という遊びにおいて、料理づくりの知識を現実化できるといえよう。子どもたちは、日常生活において発揮できる力を、経験を通して獲得していくのである。

例えば、カレーライスについて質問すると「にんじん」「ごはん」「じゃがいも」「トマト」「つけもの」「ふくじんづけ」「カレールー」「お肉」と次々に答えている。子どもたちが体験をもとに既有知識を言葉によって表現している姿である。

また、作った食べ物を発表する場において、みんなで「ケーキ」と答えた後、すぐに一人が「誕生日ケーキ」と言い直している。イメージして作ったものを正確に伝えようとしている。「誕生日ケーキには、何がのっているのかな」という質問に対しての「ろうそく」「いちご」という単語の答えに「ローソクのせた」と保育者が「のせた」という言葉を補った。このことにより、子どもたちは、自分の言葉をしっかりと受け止められたことを確認でき、答え方のモデルとしても学ぶであろう。具体的な質問に対する答え方の基礎になる。このように「食べ物づくり」という遊びを通じて、その食べ物の材料を知り、より一層食べ物に対しての興味関心を高めることにつながっていくことになる。

②思考力、判断力、表現力等の基礎

例えば、ラーメンを作るときには、黄色い毛糸を使って麺にしたり、緑のストローを細かく切ってねぎにしたり、チャーシューを画用紙に描いて茶色の色を塗ったりと、これまでの経験や知識を使ってイメージを膨らませながら食べ物作りを楽しんでいる様子が観察された。「ゆで卵ものせよう」「海苔ものせたい」と、ラーメンをよりおいしそうにするには何をのせればよいかを考えて試行錯誤する姿が見られた。まさに思考して、選択し、そして表現しているのである。保育者は、子どもたちの発想をより豊かにするために、何を作っているのかを問いかけ、言葉を使って自分のしていることを説明する機会を増やし、どのように考えているのかを確認させていくことが大切になる。

③学びに向かう力・人間性等

例えば、ケーキを作る場面において「誕生日ケーキにする」という意見を受け止め、「ろうそくたてようよ」「誕生日ケーキにする」「いちごをのせる」「ブルーベリーのせる」「クリームものせる」と、次々と知恵を出し合っていた。「本物らしくするためには何をのせたらいいだろう」など、さらに目的を共有しながら創意工夫する姿は「協同的な学び」といえよう。

さらに、作った食べ物を発表する場面において、パフェを作った子どもたちは、同じくパフェを作ったグループがパフェに何をのせたかについて、そのものを見ようとして近づいていき、興味深く聞きあっていた。そうした姿が、小学校における聴き合う姿へと育っていくのであろう。

6. 絵本から「遊び」に発展させる保育実践の有効性

このように、絵本を読んで楽しんだことをもとに食べ物づくりとして表現して発表す

ることにより「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」が育まれ、言葉の広がりやうかがえる事例が観察され、絵本から広がる「遊び」のプログラムの有効性を認めることができた。

幼稚園の生活は「遊び」を中心として環境を通して行われている。「遊び」は幼児にとって総合的な学びであり、学びに向かう力につながっていく重要な場面である。また、預かり保育時間は、異年齢の子どもが「遊び」を通して協同性を育む貴重な機会となる。今回は、「食べ物づくり」の遊びにおいて、4歳児と5歳児が、絵本の読み聞かせにより、イメージを広げ、造形活動を楽しむことができた。

子どもたちは日々の生活の中において、このような「遊び」を通して様々な経験を積み重ねていく。一つの遊びによって一つの資質・能力が育まれるものではなく、様々な要素が絡み合っただけで総合的に子どもたちは成長を遂げていくのである。

今後は、さらに様々な児童文化財を用いた幼小連携につながるプログラムを開発していきたい。

注

- 1) 文部科学省・厚生労働省・内閣府：平成29年告示 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領〈原本〉、チャイルド本社、2017
- 2) 角田三友紀・西田淳：小学校教育とつながる幼稚園教育における「言葉」～幼小の連携を視野に～、教育システム研究(奈良女子大学教育システム研究開発センター)、13、pp.123～131、2018
- 3) 森川拓也：領域「言葉」から「小学校国語」への展開についての考察—幼保小接続の視点から—、桜花学園大学保育学部研究紀要、17、pp.175-191、2018、
- 4) 近藤章：保幼小連携にむけた絵本の活用—「主体的・対話的で深い学び」を目指して—、豊岡短期大学 論集、14、pp.193～202、2018

参考文献

- 小川恭子・駒形武志：幼小連携を視野に入れた国語教育について—絵本を題材として—、藤女子大学人間生活学部紀要、54、pp.81-89、2017
- 柴崎正行・戸田雅美・秋田喜代美編著：最新保育講座⑩保育内容「言葉」、ミネルヴァ書房、2010
- 全国幼児教育研究会：学びと発達の連続性—幼小接続の課題と展望、チャイルド本社、2006
- 高野浩：新「幼稚園教育要領」における領域「言葉」の学びの内容と課題—言語文化の視点から—、千葉経済大学短期大学部研究紀要、14、pp.55-62、2018
- 民秋言編者代表：幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携認定こども園教育・保育要領の成立と変遷、萌文書林、2017
- 仲本美央・樋口正春編著：絵本から広がる遊びの世界—読み合う絵本、風鳴舎、2017
- 秀真一郎：絵本の読み聞かせにおける—考察—感情の有無からくる影響—、吉備国際大学研究紀要、28、pp.1-11、2018
- 無藤隆・汐見稔幸編著：イラストで読む！幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領はやわかり BOOK、学陽書房、2017

付記

本研究は、明日香村教育委員会とこども学科との連携事業「平成30年度特徴ある幼児教育（実証実験）」の一部をまとめたものである。